

# 川特だより

<学校教育目標>

『ひとりだちする生徒

～社会的に自立できる心豊かな人間を育成する～』

<めざす学校像>

『生徒一人一人の自立を育てる 笑顔あふれる学校』

キーワードは、多様性。

アイルランド戦の歴史的勝利に沸くラグビーワールドカップ2019ですが、今ワールドカップを通して、三つのことを学んで欲しいと考えます。個人的には、ラグビーワールドカップ2019が、国内で開催されたことは、日本の未来にとっても大きな転機になると考えています。それは、ラグビーが、最もメッセージ性の高いスポーツであるからです。ラグビーは、日本ではまだ馴染みの薄いスポーツですが、世界では、オリンピック、サッカーに次ぎ、最も観客を動員する人気スポーツです。ラグビーには、陣取りゲームでありながら唯一、前にボールをパスできないという独特のプレースタイルとレフェリーへの敬意、試合中は監督やコーチがグラウンドに入らず、全てを選手自身の自主性に任せることや試合後には、勝敗を超えた互いの健闘を称え合うノーサイドの精神等の独特な文化があります。

今、日本開催のラグビーワールドカップから学んで欲しいことの一つ目は、多様性についてです。この多様性は、観戦スタイルにも象徴されています。観客席は、サッカーのように対戦国で区切られておらず、ファンは入り交じって応援し、素晴らしいプレーに対しては敵味方なく称賛し合います。また、国籍主義をとっていないのもその一つです。一定の条件を満たすことで代表資格を得ることができ、現に「ワンチーム」をスローガンに掲げる日本の代表選手も31人中15人が外国出身選手です。彼等は、母国より日本を選び日本のために戦っている最高の選手達であり、国籍は違いますが、日本を背負っています。日本チームのリーチ・マイケル主将は、外国出身の選手が日本人の精神を重んじ、日本の歴史や文化を日本選手と同じに理解することは、チームが一つになるために不可欠であると考え、外国人選手一人一人にこれらを詳しく、繰り返し教えたそうです。国歌「君が代」の歌詞の持つ意味も分かりやすく説き、歌唱練習も繰り返し行ったとのこと。素晴らしいことです。リーチ・マイケル主将のこうした行動は、自分と違う他者を認め、価値ある存在として尊敬することの大切さを分かりやすく表すエピソードです。他にも次のようなエピソードが伝えられていますが、いずれも、ラグビー精神であり、多様性を象徴しています。ニュージーランド対南アフリカのノーサイド後にニュージーランドの選手がピッチ上に一列に並び、深々とおじぎをした行為に、詰めかけていた満員のスタンドが沸きました。テレビ観戦していた私も感動し、心の底から込み上げてくるものを感じました。試合後の記者会見で、ニュージーランド代表の主将が、「応援が素晴らしかった。できるだけ日本人たちとつながりたいと感じていた。お礼がしたかった。」と述べました。こうした動きは、その後のサモア対ロシア戦のノーサイド後にも起きました。横一列に並び、おじぎした両国選手に、観客から温かな拍手が送られたそうで、他にもイタリアやウェールズの選手が同じ行動をしているとのこと。また、日本選手が試合後に必ずロッカールームをきれいに掃除するのを見習って、各国の代表選手が、試合後のロッカールームをきれいに清掃することを始めたそうです。感謝の気持ちを「おじぎ」や「そうじ」で表す、この日本の精神は、それぞれ、自国の文化の壁を越え、日本のやり方で敬意を払ってくれているのであり、まさに多様性尊重の精神そのものです。在留外国人がますます増加する日本において、多様性を尊重する国際化の流れを映し出してくれているように思います。

二つ目は、強い信念とメンタリティー（精神力）を持つことです。本校では、目指すべき3つの自立の中に「精神の自立」（他は「身の自立」「経済の自立」）があり、つけさせたいキャリア教育の5つの力の視点に「自己選択・自己決定する力」（他は「健康を保つ力」「働き続ける力」「人生を楽しむ力」「人と関わる力」）があります。「精神の自立」と「自己選

「自己・決定する力」に共通するのは、強い信念を持つことです。自分自身が、自らの良さや苦手を誰よりも十分に理解し、将来の成りたい自分を明確な目標として設定し、こうと決めたら、信念を持って挑戦し続けることです。ここで、最も大切なのが、最後までやり遂げるのだという強い信念とメンタリティー（精神力）です。自分を信じて挑戦を続け、挑戦の結果を素直に受け入れること、取り組み方や方法、時に、目標を修正することも大切です。初めからできる人はいません。簡単に達成できてしまう目標では、成長できませんし、達成感や感動もありません。一生懸命努力し、頑張るからこそ達成できたときに嬉しいし、失敗したとき、本当に悔しいのです。自分自身の可能性を信じ、努力を積み重ねることで、自分がやってきた努力が自信のエネルギーになるというプラスの連鎖が生まれます。粘り強さと継続が、大きなエネルギーと更なる可能性を生み出します。

三つ目は、信頼できる仲間との存在とチームワークについてです。ラグビーは、15人全てが全く違うポジションを勤め、陣取りゲームでありながら、前にパスできないという独特なプレースタイルとストイックさがあります。これがラグビー精神であり、魅力であるという人もいます。こうしたラグビーの精神を分かりやすく説明する言葉があります。「ワンフォーオール、オールフォーワン」がそれです。この言葉の意味は、一人はチーム全体のために働き、チームは一人を活躍させるために力を合わせ、一人を支えるというチームワークを意味する言葉です。まさに、「ワンチーム」をスローガンに掲げ、快進撃する日本チームがこれらのことを証明しています。仲間を信頼し、仲間と目標を共有し、各個人が自身の役割を確実に果たす事が最も大切であるということです。生徒の皆さんが、将来ひとりだちし、社会人として企業や事業所に入社・入所し、それぞれ組織の一員として働くことになるわけですが、皆さん一人一人が企業や事業所の代表であり、それぞれの企業や事業所の看板を背負って働くのであり、「チーム市立川越」の代表ということになります。仲間を信頼し、困ったときなどひとり抱え込まないこと、上司や信頼できる仲間に助けを求めたり、相談することが、これからは何よりも大切になります。

わたしたちの身近においても、グローバル化の波は確実に押し寄せています。本校の卒業生がお世話になっている企業や事業所でも、多くの外国人が労働者として活躍しています。本校生徒も近い将来、こうした方々と共に共生社会の担い手にならなければならないのです。

また、現在も、世界のどこかで国際紛争が続いています。繰り返される長い歴史の中で、私たちは、政治や経済、宗教等の信条だけでは国際平和の実現が困難であることを学んでいます。教育とスポーツによる次世代育成を通して、国際平和の実現が期待できるようにも思います。

余談ですが、私自身が、青春時代の大半をラグビーと共に過ごしていたこともあり、日本とロシアの開幕戦をスタジアムで観戦する機会にも恵まれ、歴史的な大会の幕開けに立ち会うことができました。私自身も、歴史的なラグビーの祭典からたくさんの刺激を受け、たくさんのお話を学びたいと思います。

## 現場実習が始まります。目指せ、あいさつの達人！

「おはようございます」「お疲れ様でした、お先に失礼します」。職場のコミュニケーションは、あいさつに始まりあいさつに終わります。ところで、あいさつは何のためにするのでしょうか？あいさつをすることで、①相手に対し、自分がかかわりたいのだという意思を伝えることができる。②相手に対し安心感や信頼感を伝えることができる。③相手の反応から、相手の体調や調子を知ることができる。などの効果が期待できます。あいさつは、信頼を築く第一歩です。日頃からしていないとごちなくなります。日頃から継続することで自然なあいさつができます。相手に好印象を与えるあいさつのポイントは、①自分から、先手必勝であいさつする。②視線を合わせ、笑顔で明るく声を出す。③姿勢に気を付ける。（頭からお尻までを直線にする）の3点です。あいさつができなかったことで、「無視されてしまった」等の誤解が生じてしまうこともあります。社会に出ると苦手な人と一緒に仕事をしなければならないこともあります。お客様相手の仕事であれば、ことさらあいさつは大切です。相手を選ばず、気持ちよくあいさつすることが、自分自身の評価を高め、良好な信頼関係を築く第一歩になります。

あいさつの達人を目指しましょう。

校長 阿部 和彦